

『就実教育実践研究』第16巻 抜刷  
就実教育実践研究センター 2023年3月31日 発行

# ある教育者の幼稚園の理念に基づいた 音楽表現活動と教育的関わりの事例研究

**An Educator's Case Studies of Musical Expression Activities and  
Educational Involvement Based on the Philosophy of Kindergarten**

山下 世史佳 ・ 松本 健義

# ある教育者の幼稚園の理念に基づいた 音楽表現活動と教育的関わりの事例研究

山下世史佳 (幼児教育学科), 松本健義 (上越教育大学)

## An Educator's Case Studies of Musical Expression Activities and Educational Involvement Based on the Philosophy of Kindergarten

YAMASHITA Yoshika (Shujitsu Junior College)

MATSUMOTO Takeyoshi (Joetsu University of Education)

### 抄録

本研究では、幼稚園の教育理念とそれに基づいた子どもの音楽表現活動や教育者の教育的関わりについて明らかにすることを目的とする。幼稚園17園での教育理念に基づいた教育目標と教育指導の重点について、用語を分析すると、教育目標では「元気」「やさしい」「思いやり」「考える」「明るく」「やりぬく」「表現」「頑張る」「豊かな心」「遊ぶ」「たくましい」「主体的に活動できる」「みんなと仲良く」が多用され、教育指導の重点からは「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける」等の幼稚園教育要領に即した用語を作成することができた。元幼稚園教諭へのインタビューでは、根底にある教育理念を意識して子ども、保護者、他の教員と教育的に関わり、子どもや教員が共に音楽表現活動し経験する中で、互いに新たな関係性をつくり出してよりよく変容していく過程には、教育理念が基盤となっていることが示された。

キーワード：幼稚園，教育理念，教育目標，教育指導の重点，音楽表現活動

### 1. はじめに

多くの幼稚園には教育理念やそれに準ずる教育目標、教育指導の重点等が掲げられ、それらが園の特色となっている。教職員、保育者が、同じ教育理念を意識して人と接することで、意識が同化され、人への接し方にまとまりが生まれると考える。幼小連携だけでなく、幼稚園から大学までの一貫教育の起点となる幼稚園においては、どのような教育理念が掲げられ、教育理念に基づいてどのような音楽表現活動がなされているのだろうか。

幼稚園の理念に関する研究には、小笠原の幼稚園の理念と実践の進化の研究がある。この研究ではフレーベルの理念を取り上げ、日々、幼稚園で子どもと関わる保育士がどのような幼稚園観を抱き、目の前の子どもと対峙し、関わり合うかについて示されている<sup>(1)</sup>。カトリック系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色をテキストマイニングの

KH Coderで分析した研究では、カトリック系の園がキリスト教の他宗派であるプロテスタント系の園の保育・教育理念と同様、「心」や「精神」に焦点化した保育目標を挙げ、身近な他者や動植物に対する親愛だけでなく超越的自然ともいべき目に見えないものに対する畏敬に重きを置いていることが示唆された<sup>(2)</sup>。音楽に関しては、大学生を対象に、オルフ教育理念に基づく授業内容から学生が何を学び、どのように音や音楽に対する学生の認識が変化するのか、オルフ教育の特徴である音楽と動きの関係をどのように捉えるのかを調査した研究がある。調査結果、音の概念の変化や「音楽」と「動き」の融合やコミュニケーションを通じた他者理解、保育者としての観点等が養われたと明示されている<sup>(3)</sup>。また、アメリカ中西部のモンテッソーリ学校で音楽教育の役割の変化や生徒の音楽体験の可能性について調査した研究では、音楽を教える際の課題や音楽の発達への影響等をリッカート尺度と自由回答形式で調査し、モンテッソーリ学校に音楽を取り入れる意味が議論された<sup>(4)</sup>。教育理念といえどもこのように多種多様ではあるが、園独自の教育理念は教員や保育者に浸透し、個々に根付いていくものと想像できる。

本研究では、教育理念に基づいた幼稚園での教育目標と教育指導の重点に出現する言葉をテキストマイニングで分析してその特徴を把握した上で、幼稚園に長年勤務した1名の元幼稚園教諭へのインタビューから、教育理念に基づいた音楽表現活動と教育者の教育的関わりを明らかにしていく。テキストマイニングは自由記述や語り等の質的分析に用いられ、言葉が出現頻度や種類、関係性に分けて図表で示していくものである。テキストマイニングでは言葉が独り立ちして表れてくるため、本来の自由記述や語りとは、意味合いや方法は組み替わる場合があるが、表れてくる図表によって新たな意味が作り出されることがある。これは人と人との関係性にも通じるものであると解釈している。丸山は「言葉の方も個としての〈単語〉は、それが属している体系と切り離しては価値をもたない」「単語の意味は文脈のなかではじめて決まる」という事実から見えてくる。この文脈は、単に文法上の前後関係にとどまらず、語が用いられるすべてのコンテキスト、すなわち言語的・社会的・歴史的状况である。同じ『民主主義』という語にしても、それが使われる前後の単語、また語り手と聞き手のイデオロギー、その発言がなされる〈場〉次第で、まことに様々な意味をもつ<sup>(5)</sup>と述べている。本研究ではそうした言葉のもつ特質にも着目しながら、教育理念に基づく教育目標や教育指導の重点、及び、ある教育者の語りについて、それぞれ言葉に焦点を置き、言葉にある意味や関係性等を捉える。

## II. 目的

幼稚園の教育理念に通じる教育目標と教育指導の重点の特徴を把握するとともに、幼稚園に長年勤務した元幼稚園教諭へのインタビューから教育理念に基づいた音楽表現活動と教育者の教育的関わりを明らかにすることを目的とする。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 調査方法

Ⅳ-1ではK市内K地区の市立幼稚園17園においてどのような教育理念が掲げられているかをHP上から調査する。各園のHP上には教育理念は明示されていなかったが、教育理念に通じる教育目標や教育指導の重点が掲載されていた。教育理念と教育目標のつながりについては、橋本が「幼稚園における教育理念を、制度的側面である法律的根拠を持つ教育の目的や目標、また、それに基づいて各幼稚園が明確にした教育目標を含んだものである」と定義し、教育理念の階層性について論じた。その結果、「教育理念の中でも、特に各幼稚園における教育目標を理念的カテゴリーの中核をなすものと見なすことが適当である」<sup>(6)</sup>としたことを踏まえ、教育目標や教育指導の重点に教育理念が表されていると認識して取り上げる。ここではその教育目標と教育指導の重点がどのような言語の概念や表現によって作られているかを分析する。K市内K地区の市立幼稚園17園の教育目標は分量が少なかったため、使われている言葉を筆者自身が手動で計算して棒グラフにまとめるアナログな方法を採用した。教育指導の重点については、AIテキストマイニング『User Local』<sup>(7)</sup>のワードクラウドを用いて分析する。ワードクラウドは、スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさと図示している。単語の色は、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表す。

次に、Ⅳ-2で大学附属幼稚園に長期間勤務した元幼稚園教諭の女性Aへのインタビューを実施する。Aは同じ幼稚園へ30年以上勤務、最後の4年間は副園長となり退職、現在は教育者として保育や幼児教育に携わっている。インタビューは非構造化面接で、実施日は2022年2月8日、時間は1時間、筆者とAの1対1の対面で行う。非構造化面接とは、インタビューの反応に応じてインタビュアーが自由に質問を投げかけ、自由回答していく方法である。インタビューとインタビュアーの相互行為やインタビューのその時の思考によって語りが変化していくのが特徴である。この方法を採用した理由は、長い勤務期間の中でインタビューに印象深かったできごと等を自由に話してもらうことで、インタビューが話しながら自己省察し、インタビュアーにとっては予想のつかない展開となることで際限なく興味深い語りへ展開できると考えたからである。Aがいま、過去を想起することで、「過去への志向性がそこに見出せるという点」<sup>(8)</sup>も重視する。インタビューの録音から起こした文字数は15500字以上に及んだが、ここではインタビュー開始後20分が経過した頃からの一部の語りⅣ-2の1)～4)、主に音楽表現活動や教育理念について語られたインタビューの部分を用いる。これらの語りは、Aの中にある教育理念とこれらの語りに繋がりと筆者が判断して選定した。語りは流れの順に示し、内容に沿って筆者が段落に分け、主題を付けた。□内はインタビューの内容をそのまま記し、―はインタビュアーである筆者の質問または応答、AはインタビューであるAの語りである。Ⅳ-2の5)では、本論文内で取り上げる語り全てをワードクラウドで分析し、Ⅳ-2の6)ではインタビュー全体を考察する。

共同研究者は社会学，教育学的視点で，考察の際に加わる。

## 2. 倫理的配慮

所属短期大学の倫理委員会迅速審査に諮問し，承認を得た。Aへは研究に関する説明文を用いて説明した後，同意を得て実施した。説明文には，研究の目的と意義，協力内容，倫理的配慮等を記載した。インタビュー内容を文字化した段階で内容を確認していただき，内容に不備や公表すべきでない部分があった場合には削除する旨も伝えた。本研究内で用いているインタビュー内容はAが了承済みの内容である。インタビュー内における園を特定できるようなキーワードや言い回しは元の形に即して変更している。

## IV. 結果

### 1. 市立幼稚園の教育目標と教育指導の重点の分析

ここではK市立幼稚園（K地区）17園の教育目標と教育指導の重点をまとめ，分析する（表1）。

表1 K市立幼稚園（K地区）の教育目標と教育の重点

園	教育目標	教育指導の重点
①	明るく元気に遊ぶ子ども 思いやりのあるやさしい子ども 考えてやりぬく子ども	「よい環境での保育」「生き生きとした保育」「心の通い合う保育」。指導の重点は身近な文化や自然，人とのかかわり，様々な感動体験を積み重ねる中で，豊かな心情をはぐくみ，道徳性の芽生えを培う。 環境の工夫や個に応じた援助に努め，主体的に遊びに取り組み，やり遂げようとする意欲や態度を育てる。 家庭との連携を密にしながら，基本的な生活習慣の形成を図り，健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
②	元気で頑張る子ども 思いやりのある優しい子ども 考えたり工夫したりする子ども 感性と表現力の豊かな子ども	主体的にかかわれるような環境の工夫に努め，自ら考え根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 身近な自然や人とのかかわりを通して，感動体験を積み重ね，豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 家庭の連携を深めながら，基本的な生活習慣を身に付け，心身ともに健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
③	健康で元気な子ども やさしくて思いやりのある子ども よく考えやりぬく子ども	身近な自然や地域の人々とかかわる中で，多様な感動体験を重ね，豊かな心情を育てる。 一人一人の幼児の特性や発達の課題を理解し，個に応じた指導に努める。 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通じて，豊かな感性や表現する力を養う。 家庭との連携を深めながら，基本的な生活習慣の定着を図り，健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
④	明るく元気な子ども 思いやりのある子ども 素直に表現する子ども 最後まで頑張る子ども	主体的に環境にかかわり，根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 身近な人や自然にかかわりながら，様々な体験を積み重ね，豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 一人一人の幼児の特性や発達の課題を理解し，個に応じた指導に努める。 家庭との連携を深めながら基本的な生活習慣の定着を図り，健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑤	豊かな心を持ち，心身ともにたくましい幼児の育成に努める。 明るく元気な子ども みんなと仲よく遊ぶ子ども 素直に表現する子ども	環境の工夫や個に応じた援助に努め，自分で考え，根気強く頑張ろうとする意欲や態度を育てる。 身近な自然や人とのかかわりの中で，様々な経験を通して，豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 家庭との連携を密にしながら，基本的な生活習慣の形成を図り，健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。

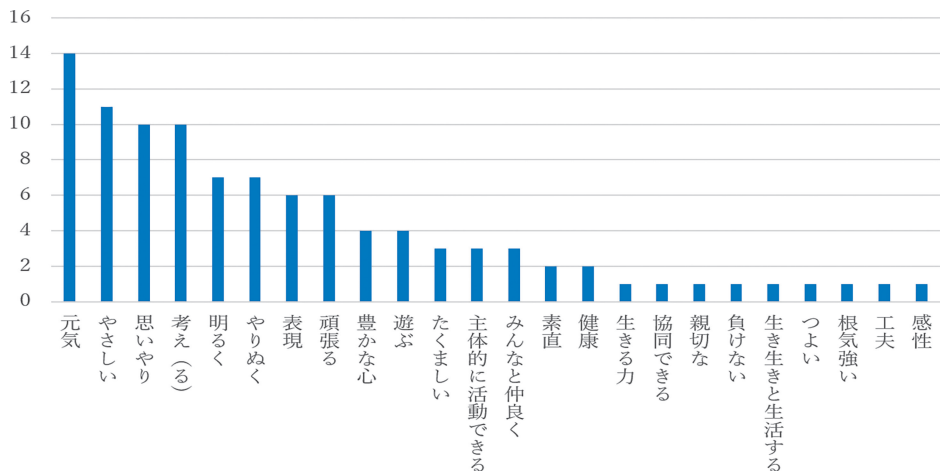
⑥	健康で豊かな心を持ち、主体的に活動できる子どもを育てる。 元気な子ども やさしい子ども 考える子ども	様々な活動に主体的に取り組むことのできる環境の工夫に努め、根気強くやり遂げようとする意欲や態度を育てる。 いろいろな人と触れ合う体験を通して、人と関わる力や規範意識の芽生えを培う。 身近な自然や生活環境に関わる中で、豊かな感性や思考力を育む。 家庭との信頼関係を深め、情緒の安定を図るとともに、健康で安全な生活に必要な基本的な生活習慣や態度を養う。
⑦	心豊かで、たくましく生きる力をもった子どもを育てる。 げんきな子ども がんばる子ども やさしい子ども かんがえる子ども	主体的に活動に取り組む、根気強くやり通そうとする意欲や態度を育てる。 身近な自然や人との関わりを通して、豊かな感性や表現力、道徳性の芽生えを培う。 家庭との連携を深めながら、基本的な生活習慣を身に付けるとともに、健康で安全な生活をしようとする態度を養う。
⑧	なかよくする子ども～だれでもとなかよく協働できる子ども～ かんがえる子ども～自分で考え、主体的に行動する子ども～ しんせつな子ども～親切で思いやりのある子ども～ まけない子ども～あきらめず、最後まで頑張る子ども～	主体的に遊びに取り組むことができるような環境の工夫に努め、根気強く頑張ろうとする意欲や態度を育てる。 身近な自然や人とのかかわり、絵本や童話などを通して様々な体験を積み重ね、豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 家庭や地域と連携しながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度や規範意識の芽生えを育てる。
⑨	生き生きと生活する子ども 思いやりのある子ども 考え、やりぬく子ども	主体的にかかわれる環境の工夫に努め、考える力や根気強くやり抜こうとする意欲や態度を育てる。 身近な人や自然や人々とのかかわりを通して、いろいろな体験を積み重ね、豊かな心情と道徳性の芽生えを培う。 一人一人の幼児の個性や育ちを大切に、幼児同士が互いに認め合い育ち合う仲間づくりに努める。 家庭との連携を深めながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑩	元気な子ども やさしい子ども 表現する子ども	主体的に活動にかかわることができる環境構成や援助の工夫に努め、自分で考えて行動し、根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 身近な人とのかかわりを大切に、多様な体験を積み重ね、豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 幼児一人一人の発達や特性に応じた指導に努め、感じたことや考えたことを自分なりに表現する力を養う。 家庭との連携を図りながら、基本的な生活習慣を身に付け、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑪	元気で思いやりのある子どものびのびと表現する子ども 最後まで頑張る子ども	身近な自然や人との関わりの中で様々な体験を積み重ね、豊かな感性や道徳性の芽生えを培う。 主体的に関わることができる環境の工夫に努め、自分なりに表現する力を育てる。 自分で考えて行動し、根気強くやり抜こうとする意欲や態度を育てる。 家庭との連携を深めながら基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑫	豊かな心を持ち、自分の力で行動する子どもを育成する つよい子ども やさしい子ども かんがえる子ども	発達をとらえた環境構成や援助に努め、身近な環境にかかわりながら自分で考え、根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 地域の人や園内外の自然に触れる感動体験を通して、豊かな心情を育てる。 自分らしさを十分に発揮できるようにし、人とかかわる中で協同の態度及び道徳性の芽生えを培う。 家庭との連携を密にし、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑬	げんきな子 やさしい子 がんばる子	家庭との連携を大切にしながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。 いろいろな人との触れ合いや体験を通して、人とかかわる力を育てる。 日々の生活や遊びの中で多様な体験を積み重ね、豊かな人情や道徳性の芽生えを培う。 主体的にかかわれるような環境の工夫に努め、根気強く取り組もうとする態度を育てる。



⑭	心身ともにたくましく、夢中で遊ぶ子どもを育てる 明るく元気な子ども 思いやりのあるやさしい子ども よく考え、やりぬく子ども	家庭との連携を深めながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。 身近な人や自然とのかかわりの中で様々な体験を積み重ね、豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 主体的に環境にかかわり、自分で考えて行動し、やりぬこうとする意欲や態度を育てる。
⑮	明るく元気な子ども 仲良く遊ぶ子ども 思いやりのある子ども	主体的に環境にかかわって、根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 身近な人や自然とのかかわりの中で、いろいろな経験を通して豊かな心情や道徳性の芽生えを培う。 家庭との連携を密にしながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑯	明るく元気な子ども 優しく思いやりのある子ども よく考え、やりぬく子ども	主体的に活動にかかわることができる環境や援助の工夫に努め、根気強く取り組もうとする意欲や態度を育てる。 身近な自然や人とのかかわりを大切にしながら様々な感動体験を積み重ね、豊かな心情と道徳性の芽生えを培う。 家庭との連携を密にしながら、基本的な生活習慣を身に付け、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。
⑰	明るく元気な子ども のびのびと表現できる子ども やさしい子ども 根気強い子ども	一人一人の幼児の特性や課題を理解し、個に応じた指導に努める。 家庭との連携に努め、信頼関係を築きながら、基本的な生活習慣の定着を図り、健康で安全な生活をしようとする態度を育てる。 幼児が遊び込める環境構成の工夫に努め、主体性や自ら考え根気よく取り組もうとする意欲を育てる。 身近な自然や様々な人との関わりを通して道徳性の芽生えを培い、豊かな心情や人とかかわる力を育てる。

上記のうち、教育目標に掲げられている「○○子ども」の○○部分にあてはめられている言葉の内訳を表2に示す。縦軸の数字は出現回数、横軸の言葉は出現した言葉を示す。この結果から、最も多かった言葉は「元気」で14園、続いて「やさしい」は11園、「思いやり」、「考える」が10園、「明るく」「やりぬく」が7園、「表現」「頑張る」が6園、「豊かな心」「遊ぶ」が4園、「たくましい」「主体的に活動できる」「みんなと仲良く」が3園、「素直」「健康」が2園、他、「生きる力」「協同できる」「親切的な」「負けない」「生き生きと生活する」「つよい」「根気強い」「工夫」「感性」は全て1園となった。

表2 教育目標の言葉







だけど、ある時は、友達と一緒に年少さんのお部屋に行って楽器の音を聴かせてあげるって手作り楽器を演奏しに行ってたんですよ。

—その子も一緒にですか。

A. はい、先生がセッティングしていってらっしゃいじゃなくて。すごい面白かったんでしょうね。面白かったことを年少さんのところへ行って聞かせてあげるって。それを聞いた時に、やっぱり子ども達一人一人、個人差はあるかもしれないけれど、得意になることとか好きになるものとか、自信があるものとか、そういうものがあると、それが広がっていくんだなって。

—得意とか自信が広がっていく。

A. (省略) うちの園がね、お遊戯会みたいなもの、お楽しみ会って言っていたんですけど、そのお楽しみ会で劇遊び、リズム表現、歌などがあったんですけど、みんなの前でリズム表現するのは抵抗があったようで。それで「どうする？」って聞いたら、先生とだったら練習する」って言ってきて、「どこですか？」って聞いたら、園庭の裏に倉庫があるからその倉庫の隙間のところで「やる」と言うから、「よし、わかった。やろうやろう。」と言って口ずさみながら、「ここでこうするのよ。こうするのよ。」って。「おーいいじゃんいいじゃん。」って。

—先生と一対一で？

A. それで、クラスの中だけではするようになったんですよ。でも、お楽しみ会って保護者の方がいっぱい来られるじゃないですか。そこで頑張ってできたら、彼は1年生になっても自信を持てるだろうなあと思っていて、なんとかできそうだと思っていたのに、直前に風邪でお休みになって。だから練習がそこで途切れるわけでしょ。まだ自信がないのに失敗したとかいう経験をしない方がいいんじゃないかなと思ってお母さんと相談して。前の日にね、子ども達に「明日お楽しみ会だよ。Bくんは今までずっと頑張ってきてたけど、風邪でお休みしてたでしょ。でもね、明日は来てくれるんだって。でもたぶんもしかしたらすごい緊張するかも知れないからその時はみんな助けてあげてくれる？」って。

—先生が事前に。

A. うん、それで、子ども達がどこまでするかとは思ってたけど信じようと思って、当

日ね、遊戯室のフロア前面、保護者が座る中で、子ども達がリズム遊びをしたんですよ。私はピアノの方にいたりするんでそばにいてあげられない状態で、円になってリズム遊びを踊るわけですけど、その時に一瞬そのBくんの動きが止まったんですよ。そうしたら円の対角線にいる男の子が目くばせして、教えるわけ。こう。

—え！！

A. それが私も見えて。そしたらBくんが思い出したんでしょうね。またちゃんとやりだして。

—すごすぎる。

A. (省略) だから5歳でもそういう力をもっている。Bくんも素晴らしいと思ったんだけど、そうやって周りの友達の状態をふと感じ取ってアイコンタクトを送ってちょっと早めにやって教えることも素晴らしいと思って。

—素敵です。

A. そういうのを思い出しましたね。だから、一人一人が認められていくというか、一人一人が自分なりの感じ方というか考え方ということに自信がもてていく？でまた友達と関わる中で、工夫することを楽しんだり協力したりっていうことをする。でもそういうことができるようになるためには、自分が心を開ける状態でないとうまく伸びていかないという気がして。

このインタビューではBくんに関するエピソードが語られている。自己表現の苦手なBくんだったが、楽器作りが楽しくできたこと、自分なりによくできたと思えたことで年少クラスへ行き、年少の友達に誇らしさを胸にその楽器を見せたり触らせてあげたりしたのだろう。Bくんは楽器作りを通してAの言うように「得意になること、好きになるもの、自信があるものが広がって」いき、自己表現の一つとして年少のクラスへ楽器を見せに行くという積極的な行動を起こしたと考えられる。

最初は発表会で発表するのを拒んだBくんがAと一緒に倉庫の隙間に隠れて練習したのはBくんのAを慕っている心情が表れたエピソードである。体調不良で練習できない期間が続いたため、AはBくんの症状や参加の有無などを母親と相談している。Bくんの母親としては、Bくんが周りに馴染みづらいことを十分に理解しながら、これまでに人前で思うように自己表現できなかったBくんが、今回は発表会に出るつもりでAと懸命に練習を頑張ってきたので本番に出させてあげたいという願いが強かったと推察する。Bくんが発

表中に振りを忘れて困る状況になったとしても周りの子どもがBくんを支えてあげられるように、事前にBくん的心情や状態などをクラスの子も達へ伝えていたAの配慮は、細やかで行き届いている。Aが事前にクラスの子も達へ声掛けしたことにより、クラスの子も達は発表会でBくんを支えようと考え、実際に本番で振りを忘れたBくん、クラスの子もがアイコンタクトをしながら振りを教え、Bくんが人前で恥をかかないようにとBくんを助けている。この語りは、他者を思う力、助けようと支え合う力が子どもの中に備わっている事実が明確になった場面である。Bくんが本番で失敗することを結果的に避けられ、この経験はBくんにとって良い経験となり、成功体験ともいえる自信につながる出来事となったと推察する。Bくんはこの経験を通して、「自分のことをわかろうとする人との交流からくる人への信頼感と安心感」(福田)<sup>(10)</sup>を得られただろう。

Aの語りから、「一人一人が認められる」「自分なりの考え方に自信がもてる」など、Bくんが他者との関わりを通して自分はここにいてよいと感じ、自身を認められるようになったことが読み取れ、子どもの応用力や互いを認め合う相互主体性(鯨岡, 2006)<sup>(11)</sup>が表れた語りとなっている。つまり、Bくんの手作り楽器の事例では、Aが設定した教材があまりに面白く他児に見せようとするBくん自身の主体性が育まれた。発表会の事例では、Bくんが信頼するAからの声掛けで発表会に出る気になり、Aと一緒に発表会に出るための練習をずっと頑張って様子、子ども達がBくんを支えようと発表会当日、自発的にBくんとアイコンタクトをしながら振りを教えた様子は、子ども達の主体性を育んだ事例であるといえる。子どもを信じて声掛けしたところ、Aの想像以上の相互作用や展開が子ども同士や教員と子どもの中に表出したのである。

## 2) 子どもが心を開けるようにもっていくコツ、いろんな感じ方があってよい

—心を開けるようにもっていくのは、例えばコツがあったんですか。

A. (省略) 音遊び一つにしてもいろんな感じ方があっていいよねって。遊びとかも、上手にできたとかじゃなくて、いろんな感じ方があってもいいよねってというような内容をすごく大事にしていたかなと。例えば、替え歌なんかもおもしろいじゃないですか。「月夜の晩に」のリズム遊びをした時に、子どもたちが歌詞を自分たちで考え出したんです。

—それは子どもたちが考えて言い出したんですか。

A. 月夜の晩にキリンが浮かれて踊りだすって歌詞を作ったんです。キリンになって踊る時には鳴き声を「キッキキキキ・・・」と表現しているんです。(笑) だから大人の私なんかの頭だったら、キリンの鳴き声を擬音語で表現するのはどうするかって思っちゃうけど、子どもってすごい柔らかい感性で表現するんですね。

「いろんな感じ方があっていい」「子どもは柔らかい感性で表現する」と言うように、子どもの一人一人の個性を伸ばしていき、子どもが心を開けるようにもっていくことは、教員と子ども間や子ども同士の間で、感じたことを素直に表現してよいという許容され容認される感覚が広がっているからこそ伸ばせる子どもの潜在的な力であろう。子どもの個性は千差万別であり、突拍子もない表現をし始めることがあるが、表現に間違いはない。キリンの歌では、キリンの頭文字を取って「キッキ」と言うということにしているが、固有名詞と鳴き声をつなげて考えられている点には子どもの柔軟な発想が表れている。子どもの表現方法を否定せずに引き出すことは、教育理念の「主体性を育む」につながっていくと考える。子どもの柔軟な感性はAの支援によって、どこまでも柔軟に広がっていったと推察する。

### 3) 管理職の立場で新任の先生の見出す

A. 思い出したのが、管理職している時に新任の先生が配属されてって時に、お楽しみ会で劇遊びをするって言う時に、新任の先生がすごい一生懸命頑張って、ずっと本番当日までも子どものことをよく見てるなっていうことは話を聞いてて感じてたんですよ。ただそのお楽しみ会当日になった時に、劇遊びとったりするんですけど、ちょっと子どもが緊張してた感じで、それを彼女がすごい責任を感じたみたいで、終わった後「先生、すみませんでした。」って謝るわけ。何か思ってたら「子ども達が持っている力を私が発揮させることができなかった。」って泣くんですよ。緊張している感じだったから、傍から見ればそういう感じなんだろうなって。「いやでもね、あなたはすごい、ずっと一人一人よく見てたでしょ。劇遊びっていろいろ音楽的表現も入っていくわけだけでも、その当日にどう自分たちの力を発揮するかも大事なんだけど、そこに行くまでに、子ども達がいろんなことを考えたりとか、それをすごい救い上げてたよね。」って。「すごい子どもたちを見てたでしょ。それをクラスだよりも、そのプロセスをしっかりとあなたが見てたことを書いてみたらどう？」って言ったんですよ。でも彼女は少し戸惑っていて、それって下手すると言いつけになるかもしれないと思っていて、「いやそうじゃなくって保護者の方っていうのはお楽しみ会当日しか見ていなくて、そこに至るプロセスを見てないでしょ。見てるのはあなたじゃないですか。」

—そうですね。

A. だから「それを保護者の方に、子ども達はそのプロセスの中でどんなことを感じたり考えたり頑張ったりしていたっていうのを書いてほしい。」って言ったんですよ。そしたらね、私も書いたことのないようなクラスだよりも。一人一人の良さをぜんぶ挙げていって、一人一人ですよ！「うわーやっぱりよく見てたよね。」って話をして。で、保護者の方からもお手紙をもらいました、良かったね！っていう話が。

—それは、保護者の側からしてもすごい嬉しいですね。自分の子どもをこういう風に見てくださっているんだって。

A. そう、こういう風に見てくれているんだっていう。なんかこう、出来栄えとかだけじゃなくって、表現に至るまでのプロセスをいかに丁寧に見ているかっていうところが彼女は新任なのにやっていたんで。

この事例では、管理職の立場でのAの新任教員との教育的関わりについて語られている。お楽しみ会で子ども達の持っている力を発揮させてあげられなかったと後悔する新任教員に対し、そこに至るまでの過程で、新任教員が日ごろ子どもの様子を詳細に見て丁寧に関わっていたことを知っていたAは、一言で言えば「よくやった」という慰めに近い言葉をかけている。その理由として、新任教員が子ども達一人一人をよく見ていたこと、劇遊びを発表するまでの間に子ども達がいろいろなことを考え、それを救い上げていたことなどを、本人にわかるように伝えていた。この声掛けによって新任教員は、管理職であるAに自分の頑張りを認められ、承認されていることを実感できたと推察する。また、自分が関わってきた方法は間違いではなかったと思い、胸を撫でおろしたと想像できる。その後、クラスだよりでお楽しみ会までの子どもの様子を書くようにAが新任教員へアドバイスしたところ、新任教員は一人一人の良かったところをすべて挙げ、保護者からも喜ばれた。Aは子ども一人一人をよく見ていることはわかっていたが、ここまでとは思わなかったというが、クラスだよりに子どものことを書いてみるようにと教育的アドバイスをしたのはAである。新任教員にとって不完全燃焼に終わった可能性があったお楽しみ会は、保護者に喜ばれ、結果として新任教員が保護者に向けて丁寧に子どもとの関わりや一人一人の成長を伝えたことで、保護者が家庭では見られなかった我が子の成長の一面を実感できたと想像する。中野の言うように、「取り組みの過程で起きている子どもたちの様子や保育者としての思いなどを、保護者と共有していくこと」<sup>(12)</sup>が大切だろう。「主体性を育む」という教育理念が土台にあったことでAがこうした関わり方を新任教員に対して行い、新任教員も自身の力を発揮できたとも考えられる事例である。A自身は新任教員への是認や助言をしたことに対しての新任教員のフィードバックの深さに感銘したとともに、管理職としての自身の在り方を確認したと考えられる。

#### 4) コーラスグループとの行事を通じた交流

A. 保護者の有志の方によるコーラスグループがあって、七夕とかクリスマス会の時とかに保護者の方が歌を歌ってくださっていたんですよ。行事の日には先生達にとっても子ども達にとっても保護者の方が歌っているその時だけを見てるんです。でも行事当日までに保護者の方は練習を積み重ねていらっしやるので、その練習風景を見させても

らったんですね。そして「お母さん達がこんな風に練習されていますよ」というのを先生達に言うんですね。すると行事が終わった後、先生達で保護者の方へ心を込めて一言が言えたりするじゃないですか。また、子ども達の感想と感謝をお手紙にして渡すんですね。するとまた保護者の方からお手紙が返ってきて、「喜んでもらってありがとうございます」と。そしてそれをまた先生達に回覧して、そうするとありがたい輪が広がっていくから、それがすごい嬉しかった。

(省略)

A. やっぱり結局人って自分がしたことが子ども達に喜んでもらえたとか、すごくやりがいがあったりとか。

—そうですね。何も反応がないより、何かの形で見えたらすごくまたその・・・

A. そう。だからそういう一人一人の前向きさが出てきたりとかやりがいを感じたりすると、それが集団になった時に集団の雰囲気となってくるんじゃないかなと。

当園の教育理念「主体性を育む」の名の通り、保護者や教員、子どもとの交流が盛んで、Aの語りからも穏やかでのびのびとした雰囲気が感じられた。Aが時間を見つけて、コーラスグループの練習も見学に行き、その様子を管理職の立場から他の教員へ伝えたことで、他の教員は保護者の様子がわかり、このような関わりを通して、教員と保護者の関係は良好になると考えられる。行事で子ども達の保護者が子ども達に歌のプレゼントをすることで、子どもにも保護者にも嬉しい時間となり、子どもの発表を支えることに懸命になっている教員にとっても和む時間となっていたと想像できる。

## 5) インタビューの分析

インタビュー1)～4)について、インタビューアの発言を除き、インタビューアの語り全てを前述の解析ツールを用いて出現頻度順ワードクラウドで分析した結果は以下となった。

出現率の高かった言葉から、「すごい」「思う」「言う」「子ども達」「保護者」「遊び」「先生」「表現」「感じる」「いく」「一人一人」「お楽しみ会」「できる」となっ

た。これによると、Aは幼稚園教諭として、「先生」として「保護者」や「子ども達」「一人一人」のことを思い、「子ども達」が「遊び」を通して「感じる」姿を見守り、日々「子ども達」の力を「すごい」と「思」い、「お楽しみ会」では「保護者」が見守る中で「子

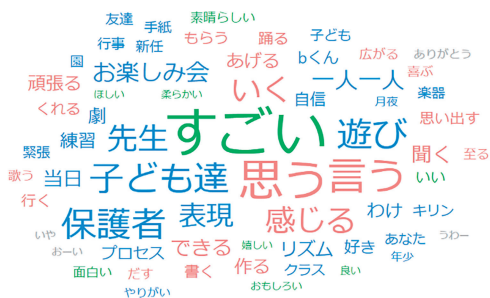


図2 インタビューのワードクラウド



ども達」に「すごい」と「言」って伝えていた等、語りは様々に統合できた。結果から、長期の幼稚園勤務期間において、Aは子ども達や保護者、他の教員達の「主体性を育む」ことができていると読み取れた。

## 6) インタビュー全体の考察

インタビューでは、Bくんや新任教員の事例が出現した。Bくんの事例では、AがBくんと一緒に練習したことが語られたが、AはBくんと同じ時間を共有し、共に経験し、介入したり援助したり活動したりしながら、Bくん自身の心を開いて表現しようとする成長や変化を目の当たりにした。Bくんの成長や変化を通して、A自身も子どもとの関わり方を振り返り、教育者としての自身のあり方やふるまいを問い直していったと考えられる。また、Bくんにとっては、当園が昼間の生きている居場所であり、生活の一基盤となっている。園には他児がいて、他児はBくんにとっては互いの存在を認め合いながら互いに成長していける存在となる。Bくんはこの発表会までには、直接的な他児との関わりを避けがちで、自身を表現したり頑張り抜いたりすることにも自信をもてなかったかもしれないが、発表会当日に他児がBくんをサポートしたことで、Bくんは他児に心を開くようになった可能性が考えられる。近年、Bくんのような個性的な子どもを含めて保育現場は多様化しているが、個性を認め、共に育ち合うことこそ子ども達の「主体性を育む」ことになり、また、子どもにとっては一人一人が多様化する社会を生きていく術を身につける基盤となる。Bくんをサポートした他児は、仲間の一員であるBくんと一緒に発表会を良いものにしたと頑張っただろうし、Bくんは他児のサポートによって音楽表現活動へ主体的に参加でき、改めて自身がいま、ここにいられることを感じ、園を自身の居場所だと再確認できたとともに、表現活動を通して仲間の存在を強く意識できたと考える。Bくんにとっては、他児のサポートを受けてやり切ったことで、発表会当日よりもきっと翌日以降の方が、他児との関係を築く上では過ごしやすくなったと推察する。子どもは、「こうあるべき」という既成概念をあまり持たないことから、他者と相互作用的に関わりながら他者から自身の在り方を学ぶ。この経験を重ねて、いまここにいる自分を、他者との関わりによって次の瞬間には違う自分へと柔軟に変容させていく。Aは子どもと関わる日々の中で子どもと対峙しながら、子どもを一人間と見て接し、子どもからも多くのものを得たと推察する。さらに、Aは、折に触れて子どもの「主体性を育む」ことを思考し、子どもが主体的に成長する姿を通して主体性が育まれていることを実感し、自身の教育者、保育者としての在り方を問い直していったとも考えられる。

「月夜の晩に」のリズム遊びの事例では、子どもの表現方法を否定せずに引き出したことで、子どもから柔軟な表現が主体的に出現した。子どもの柔軟な表現が主体的に出現したことでAは子どもの発言を心から受け止め、その表現力に感銘している。このような子どもの表現の素朴さ、可愛らしさは大人になるにつれて忘れがちになるものであろう。

管理職としての新任教員への声掛けや指導の事例では、Aが新任教員の元々持っている

能力を見抜いていたことでできた新任教員への助言によって、新任教員はAの想像以上に保護者へのフィードバックを丁寧に行っている。このことでAは新任教員の主体的な働きかけを導き出し、新任教員と保護者との信頼関係を強固にし、管理職としての自身の在り方を確認したと考えられる。

また、コーラスグループの行事についての語り「結局人って自分がしたことが子ども達に喜んでもらえたとか、すごくやりがいがあったりとか」「一人一人の前向きさが出てきたりとかやりがいを感じたりすると、それが集団になった時に集団の雰囲気となってくる」は、コーラスグループの保護者の様子と自身を重ねて語っているように想像できる。教員であっても、子どもへ働きかけたことに対して、子どもから良好な反応が返ってきたり、良い関係性へと変化するきっかけをもたらしたと実感できたりしたら、それがやりがいとなり、他の教員へもその気持ちが伝わり、職場が居心地の良い空間となっていくだろう。子どもや教員が共に活動し経験する中で、互いに新たな関係性をつくり出してよりよく変容していく過程において、教育理念が基盤となっていると捉えられた。

## V. 総括

本研究では、K市K地区の幼稚園17園の教育理念に基づいた教育目標及び教育指導の重点にある言葉の分析と、所属した幼稚園の教育理念に基づいたAの音楽表現活動と教育的関わりについて検討してきた。教育目標については、「元気」「やさしい」「思いやり」「考える」「明るく」「やりぬく」「表現」「頑張る」「豊かな心」「遊ぶ」「たくましい」「主体的に活動できる」「みんなと仲良く」といった用語が多用されていたが、これらの言葉からは、このような子どもに育てたいという教育理念が浮かび上がった。教育指導の重点については、「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける」や、「心情、意欲、態度」等の幼稚園教育要領に示されている用語ができ、国の方針と連携していることが明示された。これらから、各園において教育理念に即した教育目標等が定められ、それを日々教職員が意識することで、それに見合った教育的関わりを生み出すねらいが読み取れた。

AのインタビューのBくんの事例では、Bくんが発表会で成功体験を積むことができ、Bくんのことをクラス全体で考え、Bくんを支えながらのパフォーマンスを意識することで子ども同士の自発的なまとまり、相互主体性が育まれる様子が明らかになった。さらに、音楽などの芸術活動は、子どもの表現を膨らませられる要素となると考える。ゆえに、Bにとって何かを表現することが、自分自身を表現できる一つの方法となったと想定できる。また、Aは根底にある教育理念を意識して子ども、保護者、他の教員と教育的に関わり、子どもや教員が共に活動し経験する中で、互いに新たな関係性をつくり出してよりよく変容していく過程には、教育理念が基盤となっていた。インタビューを通して、Aの目線から、教育理念に基づくAの教育者としての関わりと働きかけによって、子ども自身が他児との関わりを通して自身の居場所をつくる様子や、Aや子ども、教員、保護者が関わり合いながら生き生きと経験を共にしている様子がありありと示された。

本研究の限界は、K市内K地区の幼稚園に特化して教育目標や教育指導の重点を分析することになった点と、インタビューが1名のみであったため他の例との比較ができていない点である。教育理念に関しては研究範囲を県内、国内、海外と広げていけば、また異なった結果が得られただろう。インタビューは個別性が強いので、教育理念の意識に関しては個人の人間性も深く関与すると考える。しかし、教育理念と音楽表現活動や子どもとの教育的関わりとを合わせて考察できたことがこれまでの研究にはあまり見られなかった本研究の成果である。今後は、さらに子どもや大人の音楽表現活動における音楽を通した人との関わり、考え、人々の変容について引き続き研究していく。

## 謝辞

インタビューをご快諾くださり、事例をご提供いただいた上、研究にも協力してくださった先生に、心より御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- (1) 小笠原道雄, 2017, 幼稚園の理念の深化と実践の進化: フレーベルの幼稚園創設175周年記念祭での二つの講演から, 広島文化学園子ども・子育て支援研究センター年報4巻, pp.5-12.
- (2) 鈴木康弘, 吉田直哉, 安部高太郎, 2019, カトリック系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色—日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区(神奈川・山梨・長野・静岡)に着目して—, 敬心・研究ジャーナル3(1), pp.115-123.
- (3) 本多峰和, 2015, オルフの教育理念に基づいた音楽表現の授業実践—大学生を対象とした質問紙調査による自由記述の分析—, 名古屋女子大学紀要61, pp.237-248.
- (4) Rekha S. Rajan, 2016, Music education in Montessori schools: An exploratory study of school directors' perceptions in the United States, *International Journal of Music Education* 35(2)
- (5) 丸山圭三郎, 2012, 言葉と無意識, 東京都, 講談社.
- (6) 橋本弘道, 2018, 幼稚園における教育理念に関連する制度と理念浸透に関する一考察, 鶴見大学紀要第3部保育・歯科衛生編, pp.53-60.
- (7) User Local HP <https://textmining.userlocal.jp/> (2022年11月9日取得)
- (8) 野矢茂樹, 2020, 語りえぬものを語る, 東京都, 講談社.
- (9) 文部科学省 幼稚園教育要領 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm) (2022年11月21日取得)
- (10) 福田香苗, 杉田敬三発行, 2021, 発達 通巻第165号, 京都, ミネルヴァ書房.
- (11) 鯨岡峻, 2006, ひとがひとをわかるということ, 京都, ミネルヴァ書房.
- (12) 中野圭祐, 杉田敬三発行, 2021, 発達 通巻第165号, 京都, ミネルヴァ書房.